

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年4月19日現在

機関番号：38004

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22590494

研究課題名（和文） 4離島における死生観教育の展開と展望を探る医学教育的研究

研究課題名（英文） The medical education from the standpoint of the research on the life and the death in 4 neighboring islands named by Yoron, Aguni, Tarama and Irabu.

### 研究代表者

近藤 功行 (KONDO NORIYUKI)

沖縄キリスト教学院大学・人文学部・教授

研究者番号：70271426

研究成果の概要（和文）：医療従事者は、地域における死生観を学ぶことも大事だ。その土地の伝統儀礼などがどう死生観に反映しているか、そこを念頭に置く必要がある。死生観は地域毎に異なる。そこで、生と死の側面を中心とした内容を、中学生がどう理解しているか4離島で調査した。生まれた時のことへの理解、その記憶、葬られた先祖への感謝の念、伝統行事と地域の対応といった死生観継承の側面を本研究は探求している。

研究成果の概要（英文）：研究成果の概要（英文）：Medical workers learn importantly the wisdom of the life and the death with regional differences on thanatology, such as that both reflect on traditional ceremonies. The wisdom was studied on the questionnaire surveys for the junior high school students in 4 neighboring islands named by Yoron, Irabu, Aguni and Tarama, as well as for the staffs of the town office in Yoron island. In the most recent work year, Tarama island was choosed instead of Ie island due to various factors. Peoples in these islands usually respect the dead. Moreover, they have no school in the traditonal ceremonies, even though peoples have mainly school in Amami and in Ryukyu islands. The surveys do not relate the memory of the birth to the wisdom and to the death in the own home. Peoples do not know always their own birth in three islands other than Yoron island. The staffs have more realistic thinking than the students. Thus, the formers do not expect to die in their own home, but the latters do. This work shows to retain the wisdom of the life and the death in 4 islands similarly. The wisdom in Ryukyu and nearby islands is interesting.

### 交付決定額

(金額単位：円)

|        | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2010年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2011年度 | 800,000   | 240,000 | 1,040,000 |
| 2012年度 | 800,000   | 240,000 | 1,040,000 |
| 年度     |           |         |           |
| 年度     |           |         |           |
| 総計     | 2,600,000 | 780,000 | 3,380,000 |

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：境界医学・医療社会学

キーワード：医学教育・死生観教育・与論島・死生観・生と死・在宅死・葬送儀礼・

1986年8月～与論島研究継続

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は1986年8月から鹿児島県大島郡与論町、1島1町のこの地でフィールドワークを実施してきている。自宅死亡の地域であることを解明しつつ、それを裏付ける上で法務省申請による死亡診断書の分析などを実施、当該地域が在宅死亡の自治体であることを立証に導いた。1990年代、医学界はスパゲッティ症候群を垣間見つつ、人間らしい死に方の探求が始まる。2000年代、長寿の質が問われてくる。研修医制度が変化していく中、地域医療がまた違った角度から見つめ直されることとなる時代に突入したのもこの時代である。また、産科医不足から生まれた病院で必ず亡くなることにつながらなくなった。2010年代、日本人の3大死因で第3位に位置づけられた疾患に変化が出て、脳血管疾患が肺炎に置き換わる。地域医療を展開する上で、当該地域の死生観は重要となる。最終年度、奄美群島並びに沖縄県全域を網羅した地域分析の中で、伝統行事で小中学校また高校が休校になる地域に着目した。そうすると、本研究で設定している離島のうち、与論島・栗国島・伊良部島が該当した。研究初年度で、死生観抽出の上で重要な離島がこの3離島であることと、もう1つの離島設定を熟考した結果、同様な視点から多良間島が該当していることが判明、そのため急遽、多良間島研究に着手する方向性に切り替えた。長年のフィールドワークから培った目線で、急遽、離島設定を変更したのである。

## 2. 研究の目的

医療従事者は、その地域における死生観を学ぶことが時折必要となる。その土地の伝統儀礼などがどのように死生観に反映しているか、そこを念頭に置く必要がある。なぜなら、死生観は地域毎に異なるからである。そのため、生と死の側面を中心とした内容を、中学生がどのように理解しているのか、そこを問う試みを、与論島・伊良部島・栗国島・多良間島の中学生を対象に試みた。また、与論島では役場職員へのアンケートの実施を試みることで幅広い世代の意見の聴取を狙った。

## 3. 研究の方法

初年度は、与論島にて与論町教育委員会のバックアップを得て、与論中学校また与論町役場専任職員からのアンケート調査が主体となった。これにより、昭和63(1986)年8月から継続調査を行なっている同島で、1996年に与論高等学校でアンケート調査を実施して以来の生徒対象のアンケート調査がなかった。死生観研究では、目に見える事象の抽出とそうではないものの抽出が大事になる

と研究代表者はとらえている。そのような視点のなか、初年度研究では調査地における調査の困難さに直面することにも遭遇した。そのため、2年目の研究では琉球文化圏に位置する研究対象離島をどうせめることが得策か悩むこととなる。フィールドワーカーとして、どう対応することがいいか、苦慮する年度となる。平成3(1991)年に初めて滞在した栗国島は約20年後、本研究2年目で訪島することとなる。葬送儀礼に変化が起っていたものの、与論島ではほぼ失われたと記載してよい洗骨の継承が確認できた。そのため、こうした死生観の側面を抽出しつつ、中学校の生徒を対象としたアンケート調査を実施することとした。栗国中学校では研究代表者自身の講話の後、全校生徒に説明を行ないながらアンケート説明を実施、記載をはかってもらった。伊良部中学校では担任の先生を經由して回収をはかる内容となった。佐良浜中学校では全校生徒の前で説明をした上で、そこで記載をはかった。多良間中学校では保護者が担任と学校で会う機会に、担任からアンケート配布を行なってもらい自宅で作成してくる手法となった。アンケート作成に際して、栗国島・伊良部島では、特別養護老人ホーム施設長に、多良間島では村立民俗学習資料館館長からアドバイスを受けた。

## 4. 研究成果

初年度研究は、与論島を中心として開始した。与論町教育委員会・田中國重教育長のご高配により、与論中学校また与論町役場職員からアンケートが回収できた。洗骨習俗を知っているか、死期が近くなった時の自宅死亡の慣習と今後のこうした慣習の是非を問う内容などを問いかけた。その結果、与論島の人々が継承してきているとされる死生観に関連した事象を中学生も認識している事実を確認できた。また、自宅死亡を良いことととらえている中学生が約87%にのぼるなど、こうした数値が確認できた(与論島郷土研究会で実施データの分析を行なって下さる)。与論中学校の生徒が伝統的な部分を理解している現状に対して、役場職員に関しては相違が出てきている。例えば自宅死亡の存続について、中学生は存続を希望する声が圧倒的であるのに対して、役場職員はこの自宅死亡に関しては未記入も含めて「わからない」が多い結果となる。このことを与論島郷土研究会メンバーからは、「今後の自分たちの墓が与論に存続できるかを含めて多くの課題も残されているから簡単には結論を出せないことに起因しているはず」、と分析している。このように、与論島では自宅死に対してのアンケート結果から、自宅死についての希求は中学生が重要と感じているのに対し、役場職

員の結果からはそれは困難だと判断しつつあり、後者はより現実的な内容としてとらえている。本研究を通して得られた大きい視点の1つに、地域ごとに異なる死生観に応じた生と死の側面を琉球文化圏の島々から学ぶこと、そこが医療従事者にとって重要であることにつながる点にある。そのため、与論島・粟国島・多良間島・伊良部島の近接した4島の中学生及び与論町役場職員に対してアンケート調査を進めたが、こうした調査結果から得られた視点に裏付けされる人々の持つ死生観の側面、その抽出である。なお、研究当初、伊江島を予定していたが、多良間島に変更することになった背景が初年度で派生している。

なお、与論島を除く3離島で共通させたアンケートの最初の項目結果からは、生まれた時のことについてあまり知らされていないことが分かった。生まれた時の記憶と死生観、自宅で生まれたことと生まれた時の記憶とは結びつけられていないことがわかった。4離島の人々は葬られた先祖への感謝の念を持っており、伝統行事によって学校が休みになる地域が鹿児島県奄美群島地域及び沖縄県内で10カ所ほどしかないなか、調査対象とした4離島には学校が休みになるなどの共通性がみられ、死生観の継承に類似性があると筆者は判断した。

最後にまとめとして、調査対象となる各離島における死生観の抽出が、研究に与えることとなるインパクトは以下の通りである。

- (1) 地域医療を展開する上で、当該地域の人々の持つ死生観は重要と考えられる。例えば、与論島で在宅死を希求している人々がいるなか、その実現をどう医療スタッフがバックアップするかである。1980年代後半の調査時から、若干の変化があるものの人々の在宅死に関する希求は継続している。こうした地域を柱に研究展開をはかることが不可欠となる。
- (2) 最終年度での実施アンケート結果で、最初の質問項目の生まれた時のことに対する内容では次の結果を得た。どこの病院で自分が生まれたのかを知っているかそうでないかについて、粟国島・粟国中学校1年生の事例では、3(知っている):5(知らない)となった。同様に、2年生では、0:4、3年生では、3:4、となった。伊良部島・伊良部中学校1年生は、8:13:1(空白)、2年生では、9:8、3年生では、11:18、となった。伊良部島・佐良浜中学校では、1年生は、7:26、2年生は、12:15、3年生は、9:15:1(空白)、多良間島・多良間中学校では、1年生は、11:2:2(空白)、2年生は、15:6、3年生は7:11:2(空白)となった。多良間島の1&2年生のみ生きることの認識が強いことが

うかがえた。

- (3) 本研究は、『死生学(Thanatological studies)』の構築に関連する視座を持つ。そもそも、死生観とは生および死に対する判断ではなく、生および死に対する叡智、すなわち生と死を意識することによってたどり着いた精神能力と判断することとなるため、「the wisdom of the life and the death」との英訳となることが特筆される。なお、この間の研究は、以下の口演を中心とした諸学会活動で報告をはかった。学会抄録集の記載頁は省略している。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計7件)

- ① 近藤功行：地域の伝統行事と小中学校の休校状況—伝統文化の継承を沖縄の事例から探る視点、日本民俗学会第64回年会、2012年10月7日(日)、東京学芸大学
- ② 近藤功行：沖縄・与論の伝統行事と地域対応の現況から—小・中学校の休校状況から探る視点—、2012年度奄美沖縄民間文芸学会、2012年9月12日(土)、沖縄国際大学13号館307教室
- ③ 近藤功行：琉球文化圏4離島における中学校アンケート調査から—教育と医学、特に地域の死生観とその伝承性生徒の中で探る視点を—西日本社会学会第70回大会、2012年5月20日(日)、鹿児島大学
- ④ 近藤功行：与論島における伝統儀礼の消失と死生観に関連するフィールドワークの展開、日本ホスピス・在宅ケア研究会第19回沖縄大会、2011年7月17日(日)、沖縄コンベンションセンター
- ⑤ 近藤功行：ライフサイクルと近代化のなかで—死生観教育のもたらす意義から—、第69回西日本社会学会、2011年5月22日(日)、島根大学教育棟
- ⑥ 近藤功行：与論島を中心とした死生観研究の展開—昭和63(1986)年第から継続している研究の現状と今後、第42回沖縄県公衆衛生学会、2010年11月5日、沖縄県市町村自治会館(那覇市)
- ⑦ 近藤功行：死生観教育と医療の接点に関する研究—沖縄3離島・与論島との調査研究から得られるもの—、第75回日本民族衛生学会、2010年9月26日、北海道大学

[図書] (計4件)

- ① 近藤功行：4離島における死生観教育の展開と展望を探る医学教育的研究、平成24年度研究成果報告書(1部)、総頁数170頁、沖縄コロニー印刷(製本)
- ② 近藤功行：4離島における死生観教育の

- 展開と展望を探る医学教育的研究、平成24年度研究成果報告書(1部～2部)、総頁数571頁、沖縄コロニー印刷(製本)
- ③ 近藤功行：4離島における死生観教育の展開と展望を探る医学教育的研究、平成23年度研究成果報告書、総頁数209頁、沖縄コロニー印刷(製本)
- ④ 近藤功行：4離島における死生観教育の展開と展望を探る医学教育的研究、平成22年度研究成果報告書、総頁数383頁、沖縄コロニー印刷(製本)

[その他] (計10件)

- ① 近藤功行：大型コラム「道標ふるさと伝言 12年の執筆者と略歴(執筆順)」2011年12月28日(水)愛媛新聞(連載；この間、科研費関連内容記載)
- (00) 大学新設人生の転機 これまでの軌跡、[道標 ふるさと伝言]、2012年1月22日(日)、愛媛新聞1面(連載)
- (01) 与論島にみる死生観 在宅死と終末期医療、[道標 ふるさと伝言]、2012年2月2日(日)、愛媛新聞1面(連載)
- (02) 死生観知る資料蓄積 離島研究の意義 [道標 ふるさと伝言]、2012年4月1日(日)、愛媛新聞1面(連載)
- (03) 深い人間性胸に収め 生きることを学ぶ [道標 ふるさと伝言]、2012年5月6日(日)、愛媛新聞1面(連載)
- (04) 沖縄内外の思い結集 本土復帰40年 [道標 ふるさと伝言]、2012年6月10日(日)、愛媛新聞1面(連載)
- (05) 「気持ち」の考慮必要 精神障害への理解 [道標 ふるさと伝言]、2012年7月15日(日)、愛媛新聞1面(連載)
- (06) 研究の努力財産に 大学院の意義 [道標 ふるさと伝言]、2012年8月19日(日)、愛媛新聞1面(連載)
- (07) 大学に詰め報告作成 今夏の闘い [道標 ふるさと伝言]、2012年9月23日(日)、愛媛新聞1面(連載)
- (08) 文化継承 愛郷心育む 伝統行事と休校 [道標 ふるさと伝言]、2012年10月28日(日)、愛媛新聞1面(連載)
- (09) こつこつと仕事完遂 新居浜人の気質 [道標 ふるさと伝言]、2012年12月2日(日)、愛媛新聞1面(連載)
- ② 近藤功行：佐良浜中学校アンケート、2012年10月実施、紙ファイル挿入(P137)、2012年12月(100部刊行)
- ③ 近藤功行：伊良部中学校アンケート、2012年10月実施、紙ファイル挿入(P114)、2012年12月(100部刊行)
- ④ 近藤功行：多良間中学校アンケート、2012年12月実施、紙ファイル挿入(P92)、2012年12月(100部刊行)
- ⑤ 近藤功行：粟国中学校アンケート2012年

- 10月実施、紙ファイル挿入(P94)、2012年12月(100部刊行)
- ⑥ 近藤功行：粟国中学校アンケート結果の集計、小冊子(P17)、2012年12月(250部刊行)
- ⑦ 近藤功行：粟国中学校アンケート結果、小冊子(P102)、2012年12月(100部刊行)
- ⑧ 近藤功行：与論中学校アンケート結果、紙ファイル挿入(P145)、2011年12月(100部刊行)
- ⑨ 近藤功行：与論町役場アンケート結果、小冊子(P15)、2011年12月(150部刊行)
- ⑩ 近藤功行：与論中学校アンケート結果、小冊子(P111)、2011年12月(150部刊行)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

近藤 功行(KONDO NORIYUKI)  
 沖縄キリスト教学院大学・人文学部・教授  
 研究者番号：70271426

### (2) 研究分担者；なし

### (3) 連携研究者；なし